



＜同志社人が母校を誇りに思える情報＞

「同志社ファン・レポート」（通巻 274 号）

「教育者・新島 襄」 -1-

新島襄・畢生の事業

同志社大学名誉教授 井上勝也氏



はじめに

井 上 勝 也

本日、私は教育学を研究する者として、「教育の先達新島襄」ということで、新島の教育者の面に光を当ててお話し申し上げたいと思います。

◆ 新島襄・畢生²の事業 ◆

新島襄（1843 — 1890）の畢生の事業は、我国にキリスト教を宣べ伝えると共に、教育を通して我国の近代化に貢献することであり、晩年彼は 1890（明治 23）年の国会開設³の年を期して同志社大学を設立することに邁進いたしました。

新島は明治 22 年⁴11 月 23 日、当時同志社英学校の五年生であった横田安止⁵という学生に宛てて、次のような手紙を書き送っています。

その一部を申し上げますと、新島は「小生畢生の目的は、自由教育、自治教会、兩者併行国家萬歳、小生的心情御洞察下さるべく候」（『新島襄書簡集』⁶p. 246）と申しております。これはどういう意味かといいますと、彼にとって自由教育、即ち全人教育としてのリベラル・エデュケーション（liberal education）と自治教会、これは一七世紀にアメリカのニューイングランドに移住しましたピューリタンの守りつづけた聖書中心主義と、教会の権力からの独立、自治及び教会員の平等を重んずる会衆派教会（Congregational Church）のことでありまして、我国では組合教会として知られております。新島は自由教育と自治教会の両者が相互にその機能を発揮しあうとき、

国家は繁栄するのだ、といった基本的な考え方をもっておりました。

私は本日、この自由教育を実践した教育者新島に焦点を当ててお話申し上げたいのであります。

さて、新島は晩年大学設立運動のために東奔西走し、同志社にあつて直接学生を教育する機会が少なくなっておりました。しかし旅先にあつても彼は常に学生のことを思っており、亡くなります 24 日前の明治 22 年 12 月 30 日に、静養先の神奈川県大磯の百足屋旅館で、4 通の長い手紙を書いており、そのうちの一通を先程の横田安止に送っております。教育者新島をつぶさに示す文面であります。

同志社の近情は如何。「よしの山花咲く頃の朝な朝な心にかゝる峰のしら雲」⁷と古人歌に詠ぜし如く、小生の心は日夜諸君を忘るゝ能はず。何事を聞くにつけても、今は諸君は如何あらんと心配いたし居り候。學校も機械的の製造場に漸々流れ行くは、生徒の數も増したるより、自然の勢ひにして止む能はざる所もこれ有るべく候へ共、小生平素の目的は、成る丈け法を三章に約し、我が校をして深山大澤の如くになし、小魚も成長せしめ、大魚も自在に發育せしめ、小魚たるも大魚たるもその分に應じ、その身を世に犠牲となし、此の美しき日本を早晚改良して、主の御國乃ち黄金時代に至らしめん事は、小生の日夜熱祈して止まざる所なり。貴君らの同級生中、將來望みあるものとは、充分御交はり成され、又後級生四年・三年・二年位ひにも、氣象あるものは、成る丈け御交際、御引き立て、非常に勉強も致され、又傍ら特別の餘暇を設けて充分の心術の修行を爲し、百折不撓の精神を養ひ、大胆不敵の元気を蓄へ、他日中原に雄飛するの準備を爲されん様、呉れ々々も御勧め下され度く候。又校中都花人士の子弟にして元気なきものも御見捨てなく、御引き立て下され候事は、敗鼓の皮迄でも捨てざる、國手の尤も注意すべき所なり
〔『新島襄書簡集』⁸p. 256〕。

新島は人間の価値可能性を信じ、開発主義の立場から管理主義を避け、学生の個性と自主性を尊重し、独立自治の人間を育てようといいたします。一人一人の学生を大切にし、脱落者をつくらぬように努め、彼らの人間的成長を暖かく見守る教育者の面目躍如とした文章であります。

それでは新島のこのような教育観は如何にしてつくられたのか、という問題に私は関心があるのですが、やはり九年間アメリカを始めヨーロッパで生活する間に主に培われたものだと思います。彼は 1864（元治元）年、21 歳のときに函館から密航を企て、1874（明治 7）年、31 歳にして帰国いたしました。次に彼の人間観・世界観或いは教育観の形成に大きな影響を及ぼしたニューイングランドでの生活を、とくに教育観の形成といった視点から見て参りたいと思います。（次回に続く）

* * *

（『新島襄の手紙』 pp. 316～317）の現代語訳 （『現代語で読む 新島襄』 p. 248）

同志社の近況はいかがですか。

吉野山花咲くころの朝な朝な 心にかかる峰の自雲

昔の人がこの歌に詠んだように、私の心は日夜、君たち学生を忘れることができません。何かを聞くにつけても、今君たちはどうしているだろうかと心配しております。

学校が機械的な製造工場にだんだんと流れて行くのは、学生数が増加したために自然な傾向であり、やむを得ない面もあります。しかし、私の平素の目的は、なるべく校則を少なくし、わが校が深山にある大沢〔大きな池〕のようにすることです。小さな魚も成長させ、大きな魚も思いのままに発育させて、小魚も大魚もその分に応じて身を世のために犠牲にし、この美しい日本をいつの日か改良して、主のみ国すなわち黄金時代を到来させること、それが日夜、私か熱心に祈っていることです。

君の同級生のなかで将来性のある者とは十分に交際をし、また下級生の四年生、一年生、年生でも気力ある者とはなるべく交わりを深めて引き立ててください。彼らには勉強にも大いにとり組み、またそのかわら特別に余暇を見つけては十分に精神的な訓練をも行って、不撓不屈の精神を養い、大胆不敵な活力を蓄えて、将来、中央に雄飛する準備をするようにくれぐれも勧めていただきたいのです。

また校内の都会育ちの学生で気力がない者をも見捨てることなく、引き立ててください。そのことは破れた太鼓の皮までも捨てない名医がもっとも注意することです。■

1 これは、同志社創立百周年にあたり、創立者新島襄を記念して 1979 年開設された事業の一つです。1987 年 11 月 7 日新島講座第 8 回東京公開講演会が有楽町朝日スクエアで開催され、そこでの講演をベースに後刻、手を入れたものです。

2 （ひっせい）一生涯。終生。「一の大事」「一の大作」

3 日本の近代化は「大日本帝国憲法」の制定と「帝国議会」の開設が一つの目標であった。

4 この頃、新島は病気を押して大学設立の募金運動に関東を東奔西走していた。

5 （よこたやすただ）当時、5 年生であったが、24 歳の年長で学生間でも信頼が厚く、寮長にも選出されていた。彼は新島の熱烈な信奉者で、新島の旅先にも度々、学内のことや自分の考えを伝えていた。新島からは信任が厚く、学生の中で唯一遺書を遺すほどの間柄であった。本井康博『新島襄の教え子たち（出身地別）』（2019）pp.410・411

6 同じ内容が『新島襄の手紙』 p.301 にある。

7 この和歌は、新島の愛唱歌で、学生を満開の桜に見立てる彼の教育観がよくうかがえる。

8 『新島襄の手紙』 p. 314